

優秀賞

## 金魚の命から

京都市立高倉小学校 6年 明 渚彩

小学校四年生の夏、お祭りで金魚すくいをして十五匹もすくえました。たくさんすくえたので私はとてもうれしくなり、どの金魚にも愛着がわいてきました。すべて家に連れて帰って飼いたくなり、父や母の言うことを聞かず、十五匹全部の金魚を持って帰りました。

家の水そうはそれほど大きくなく、金魚十五匹を入れるとかなりきゅうくつそうに見えましたが、私は十五匹全ての金魚を持ち帰れたことに満足していました。えさをたくさん与えて、金魚が食べている姿をながめて楽しんでたのですが、あつという間に金魚のふんと、食べ残したえさで水がにごってしまいました。水をかえて、様子を見ました。

二、三日たって、金魚に異変が起きました。一匹の金魚が傷を負っていて、数匹の金魚につつかれていました。次第に傷を負った金魚は弱っていき、しまいには死んでしまいました。私は大切に育てていたつもりだった金魚のうちの一匹を死なせてしまったのです。

それから悲劇の連続です。数日間のうちに金魚が次々と死んでいき、水そうの中には金魚が一匹もいなくなってしまうました。私は悲しくて、悔しかったです。それと同時に、なぜこの短期間のうちに、これだけの金魚が死んでしまったのか考え、調べてみました。家の水そうの大きさだと、金魚は五匹くらいまでが限界であり、私はそれをはるかに超えた数の金魚を入れてしまっていたのです。きゅうくつそうに見えた金魚たちは、やはりきゅうくつだったのだろうと思いました。

この夏、お祭りで金魚すくいをして、たくさんすくえただけでも、私は大きい金魚を二匹、妹は小さい金魚を二匹を選び、再び四匹の金魚を飼い始めました。それから三週間たって、水草に金魚が卵を産みました。ふ化するかどうかはわからないけれども、金魚は今も四匹とも元気で生きています。私はそれから学びました。ただ可愛がるだけではなく、責任を持って育てないといけないんだ、と。